

沖縄県下の猪垣 (二)

—沖縄本島—

矢ヶ崎 孝 雄

A Study of the Distribution of “Shishigaki” in Okinawa Prefecture (2)

Takao Yagasaki

猪垣の分布

猪害防除手段

沖縄県下の猪垣は沖縄本島と八重山諸島の石垣島（石垣市）、西表島（竹富町）とにみられる。本稿では沖縄本島について考察を進めたい。

まず、沖縄県下のイノシシの被害額⁽¹⁾をみると、1966年総額139,132.21ドルで、うちサトウキビ101,711.45ドルが最も多く、ついでパイナップル28,089.72ドル、サツマイモ3,602.63ドルで、これらが主要なものであった。なお、地域別では石垣市13,913.81ドル、竹富町^{たけとみちやう}1,152.48ドルに過ぎなく、沖縄本島は124,065.92ドルと圧倒的であった。沖縄本島のうちでは、国頭村^{くにがみそん}・大宜味村^{おおぎみそん}・東村^{ひがしそん}・宜野座村^{きのざそん}・金武町^{きんちやう}と、名護市^{なごし}に被害は多く、なお石川市ではサトウキビのみに被害がみられた。このほか、本部町^{もとぶちやう}・恩納村^{おんなそん}・読谷村^{よみたんそん}・沖縄市にも若干の被害があった。猪害は図1のように沖縄本島の北・中部に集中してみられたのである。

猪害防除手段の主軸は猪垣で、古来からの石・木・竹などの垣、土手のほか、近年はトタン・金網・漁網などの垣が用いられてきて

いる。それらの分布は、図1にみるように北の国頭村から沖縄市に及ぶ。音や臭の利用をふくめたのカカシでの防除は、国頭・大宜味両村と宜野座村などに分布する。これらの防除策に対して、捕獲には各種の手段が用いられ、ほぼ猪害発生 の全地域にみられる。

その主体をなすものは槍と落し穴・ワナで、恩納・宜野座村以北に分布する。戦前（昭和17年）には捕獲柵も用いられた。⁽²⁾また、サギヤイの伝統的手法も同じ地域で用いられた。犬を供にする槍での狩猟は広く、重要な手段であった。鉄砲は明治以前には用いられなかったようであるが、明治以降は重要な手段となり、槍にかわり犬を供にして狩し、猪害の地域に広く普及している。据銃は沖縄の特色といえよう。

以上、各種の防除手段が用いられてきているが、その中核をなすものは、古くは猪垣と槍であり、現在は鉄砲とトタン板とである。なお、威鉄砲のみられない点も沖縄の特色といえる。近年ラムタリンの薬物の臭と味をイノシシが最もきらうことで、これによる防除も試みられた。⁽¹⁾しかし、その普及はあまり顕著とはいえないようである。なお、猪垣に落し穴を併設することは、前報⁽³⁾でも記した

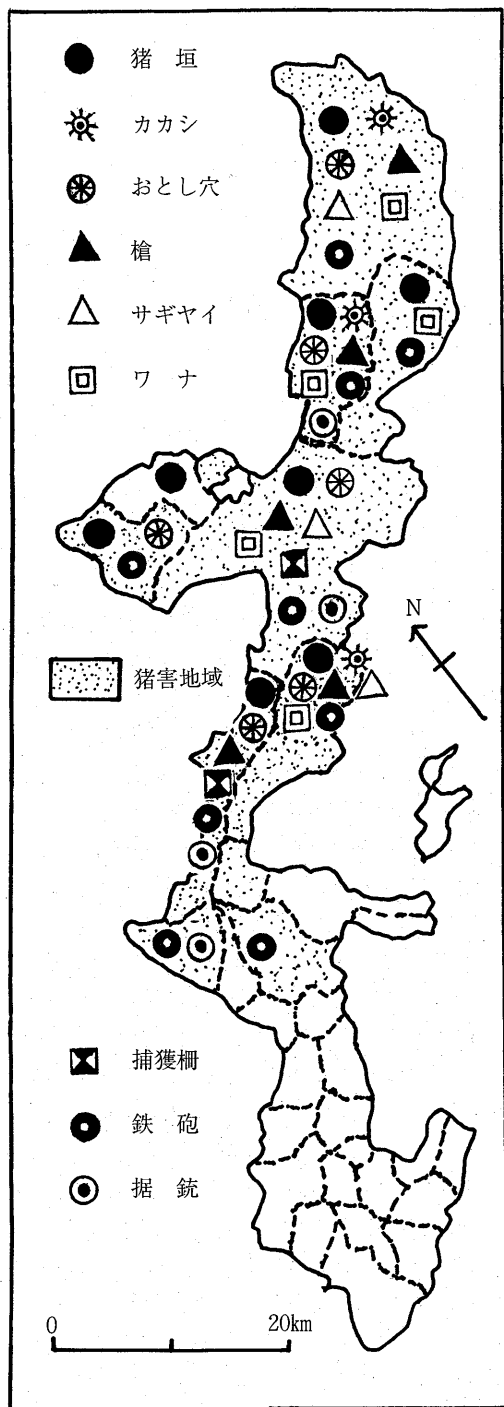


図1 沖縄本島における猪害防除手段の分布
沖縄県史、各市町村史誌、その他により作成

が、一般にみられたものである。

猪垣の分布・延長

猪害防除手段のうち、猪垣はイノシシの生息する背梁山地の海岸寄りに設置された。本部半島では山地はあるものの、それらの分布は乏しい。開発も進んでいる南部の島尻地域には分布をみない。以下に具体的に考察しよう。

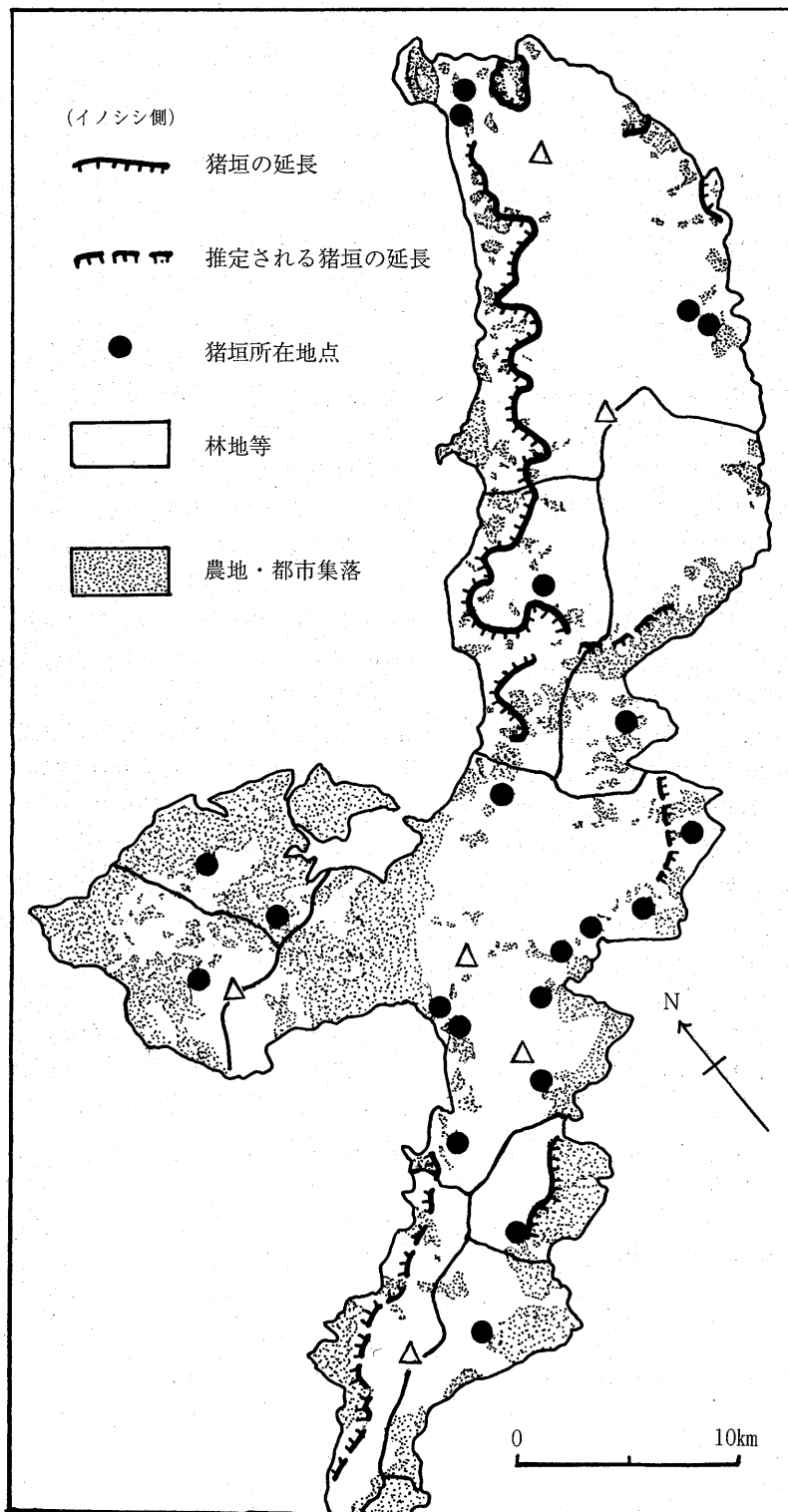
沖縄本島の猪垣は明治14年（1881）巡回の『上杉県令沖縄本島巡回日誌』に克明に記されている。⁽⁴⁾⁽⁵⁾全国的にみて、明治以降に猪垣が記録されたのは、上杉県令によるものが最初かとも思われるが、なお検討を進めたい。この資料は沖縄県教育委員会の「歴史の道」調査においても、活用されている。⁽⁶⁾⁽⁷⁾ついで明治26年に琉球探検を行った笹森儀助氏も注目し、地誌的な記録『南島探験』⁽⁸⁾に随所で記述している。地元沖縄県民にとって猪垣の重要性はわかりきったことであるが、本土よりの来訪者には注目に値する構造物であったといえよう。しかし、その延長は近年明確でなく、地元の住民にとっても不明なものとなっている。⁽⁹⁾

上記の資料などで、猪垣の延長の著しいことは注目されていたが、これをさらに聞き取り調査し、国頭地方の西海岸を主に分布を明らかにしたのは千葉徳爾博士である⁽¹⁰⁾（図2）。前報でも述べたが、この地域の猪垣は石を用い、部分的には木・土も用いられた。

その延長・分布は本図によって初めて明確になったといえようが、国頭地方の西海岸において卓越し、長城型である。海岸に沿う集落よりはずっと内陸部に猪垣は設置され、地形等に応じて、かなりの屈曲をもつのも特色である。筆者も大宜味村でその分布を聞き取りしたが、山腹に入って設置されていた点に特色を感じた。現在の国道は海岸に沿って走るが、明治初年の旧道は山寄りを縫い随所で猪垣と交ったり、望見できたので、上杉県令はその地点を克明に日誌に記したようである。

図2 沖縄本島における猪垣(石・竹木・土)と土地利用

国土地理院1/20万土地利用図(一九八五)、千葉徳爾博士原図に加え、沖縄県史・各市町村史誌その他の資料により作成。



現在はその旧道も、また猪垣も、林中に埋もれ、所在を明らかにするのは困難になっているようである。西海岸の地域は開発が進み、古くより集落・耕地も発達し、それに応じて猪垣の構築も進められた。一方、東海岸においては、奥の囲繞型の猪垣が特色で、前報にも記した。その他の数少ない集落の周辺においても猪垣はみられた。図2は以上の資料その他を総合して猪垣の分布を示したものである。

西岸北部の猪垣

西海岸において、猪垣は名護市源河の辺よりみられたが、もっと南西部にも設けられていたと思う。これから東北に向い、地形に応じて屈曲しつつも、本島北部の宜名真へ続いていた。山腹の上手に設けられたが、上杉県令の記録ではつぎのように観察されている。すなわち、源河を過ぎ峠を越えると、「右辺ニ小木ヲ、蔓ニテ結び、遠ク山ニ連リタルアリ」⁽¹¹⁾と木垣の猪垣の延長を記す。さらに北上して、伊地、謝敷、辺野喜港の辺、宇嘉川を越えてからの山路などで猪垣に接した。⁽¹²⁾島の北端の宇嘉～辺戸間では、武見坂といわれる急坂があり、この辺には「猪垣嶺ヨリ溪ニ亘ル、秦皇長城万里ノ図ヲ見ルが如シ」⁽¹²⁾と延長を記すが、山頂より谷に亘る猪垣は当時は絵図で見るとしかすべのなかった万里の長城を彷彿とさせたものであろう。当時、猪垣は焼畑と山林との境をなすもので、街道からもその延長を望みえたものであろう。なお、先端の山間にある辺戸には石灰岩の絶壁をもつ黄金森があり、これにはばまれてか猪垣は短く、丘を切り取った猪垣であったという。⁽¹³⁾この西海岸の猪垣の延長は、長崎県西彼杵半島や長野県伊那谷のもの⁽¹⁴⁾に匹敵するものといえる。

東岸の猪垣

一方、東海岸の様相は一変する。集落の発達は少く、北部では奥・伊江・楚州・我地・伊部・安田・安岐の集落が小湾の奥に立地し、その規模も比較的小さい。このうち、奥の猪

垣は前報でも示したが、囲繞型で約24^{キロメートル}の総延長（大垣約12^{キロメートル}、外垣と開墾垣約12^{キロメートル}）をもつ立派なものであった。ただし、上杉県令の記録には奥の猪垣は記載がない。県令は奥から安田へ出、船で安波へ行き、「猪垣山腹ニ連亘ス、又長城ノ図ヲ看ルカ如シ」⁽¹⁵⁾と安波の猪垣を記すから、かなり壮観なものであったと推察される。なお、安田にも猪垣はあり、全部サンゴの石積みであったが、平坦なところには竹垣もあり、約4^{キロメートル}で農地を囲っていた⁽¹⁶⁾。途中の楚州は奥からの移住者が村立したものであるが、県令の記録にはないものの、南側に半円形の猪垣が存在した⁽¹⁶⁾ことは注目される。ついで安波の山中にも猪垣はあり、県令は2度これを越えて、⁽¹⁷⁾西海岸の辺土名へ出ている。

なお、昭和46年安波の焼畑を調査した佐々木高明博士は、アラジバル（焼畑）全体を囲む頑丈な猪垣（シシハキ）の構築を記す。⁽¹⁸⁾山から5.5尺ほどの杭を伐出し用意し、こぶしの入らぬくらの間隔で打ち込み完成させた。共同作業で各戸の分担があり、全員が検査をした。極めて完備されたものといえよう。

東海岸では猪垣は集落の周囲の耕地を囲む囲繞型である点が特色である。これは大分県鶴見町のもの⁽¹⁴⁾と通じるといえる。沖縄本島の猪垣は東西両岸で対照的な特色をもつ。これは集落の密度や立地、農業開発の相異などに関連するが、根本的には地形によるもので、東海岸には農業適地が乏しかったことによるものと考えられる。

さらに南下して東村域においても、猪害は著しく、猪垣もあったようで、慶佐次のマジリガタの地点には土と石でイヌガキを造り、田を拓いた。⁽¹⁹⁾東村の猪垣は段々畑の上手にあったが、竹・木を編んで設置したといわれるせいか、ほとんど現存していないという（東村教育委員会での聞き取り）。戦後の事情をみよう。

新聞記事の集録から国頭・大宜味・東の3

村の地域では、「猪垣が戦争で崩されたため戦後はイノシシの害におびやかされつづけ、反当収量は半分減った」⁽²⁰⁾という。群馬政府は農水産業に補助金を出し産業育成に努めたが、北部の村々から強く要望された猪垣に82万円を交付し(1952)、すでに名護市5^{キロメートル}、東村5^{キロメートル}、国頭村25^{キロメートル}、大宜味村8^{キロメートル}、旧久志村13^{キロメートル}の猪垣が完成しており、150町歩を猪害から守り、451万円の利益があげられた。⁽²¹⁾しかし、猪害は猪垣のみでは手におえず、猟銃の使用をかねてから求めていたが、狩猟法立法中で応じられなかった。⁽²²⁾1953年の猪害面積は東村169反、国頭村756反、大宜味村770反で、農民は悲鳴をあげ、増産意欲を失い、その対策として半恒久的な猪垣の築造と、猟銃使用の許可を緊急事とした。⁽²³⁾1954年には80万円の助成で延長45^{キロメートル}の猪垣を北部4村の地域に築造した。この事業では山地の地形により、中腹を削り落しイノシシの降下を不能にしたり、高さ4尺の垣を積み上げたりした。その築造地域は、国頭村で東岸の楚州一奥、西岸の宇嘉一字良、大宜味村の大兼久一大宜味一田嘉里、謝名城一押川一津波、さらに東岸の東村で宮城一川田一平良、西岸の名護市域で数久田、世富慶などであった。⁽²⁴⁾北部の東西両岸にわたっているが、猪垣の不完全な地点に設置し、完備に努めたものと思われる。さらにこの年には免許制で銃器の所持、狩猟も許可された。⁽²⁵⁾なお、東村の高江には牛を放牧する垣、ウシガキがあり、⁽²⁶⁾この地域では牛馬の放牧も広く行われていた。

ついで旧久志村(名護市・東村)の地域にも長大な猪垣があった。『南島探験』には「該地方幾万頭ノ猪アリテ、作物ヲ害スル甚シ。故ニ防禦ノ為メ、各村連合シテ数十里ノ石垣ヲ築ク(高サ四尺余、厚一尺以上往来ニ木戸ヲ附シ、他府県牛馬牧場ノ提柵ニ異ナルコトナシ)。其建築ノ莊観人目ヲ驚スニ足ル。然シテ村民カクノ如キ巨額ノ費用ヲ惜マサルハ、恐ラクハ他府県人ノ夢想タルモ及ハサル処ナ

ルヘシ。」⁽²⁷⁾と感嘆している。猪垣の地域や延長を明確にはできないが、明治時代には耕地と山林の境にある猪垣は望見ができたものとみられる。

さらに南方、名護市の安部、天仁屋、宜野座村の漢那にも、猪垣として「焚籬ノ設ケ」⁽²⁸⁾があった。これは木垣であったといえよう。なお、ここには猟師3名がいたが、「七月ハ大暑ニテ、犬疲ル、故ニ獵セス」と犬を愛護し、また犬なくしては猟のできぬことを示し、年に10頭位を獲った。⁽²⁸⁾さらに名護市域で大浦湾から西岸の羽地へ抜ける山地にも猪垣が多くみられた。⁽²⁹⁾なお、宜野座村には福山と松田に猪土手が現存し、⁽³⁰⁾⁽³¹⁾筆者も実見した。

以上、本島北部の猪垣は、西岸の長城型、東岸の圍繞型と特色をもちつつ、完全に設置されていたことが知られる。なお、南部では粗放的になっていたように考察されるが、あとでみよう。

本部半島と西岸南部の猪垣

上杉県令の巡回は本部半島にも及ぶ。ここでは半島の中央部、伊豆味(本部町)から屋部に至る名護市域とみられる所に、「ヘゴ」をもって「多ク猪垣トセリ」⁽³²⁾と記すが、木垣の猪垣のあったことが知られる。なお、この半島北部には牛馬が放牧され「馬埒」があった。謝名(今帰仁村)と浦崎(本部町)の2か所である。⁽³³⁾山地は低く、開発も進んでいるこの半島では猪垣の設備は著しくはなかった。

名護市域の南部では、恩納村に近接する幸喜で猪害に悩まされ、その対応に苦心した。名護市史の『戦前新聞集成』⁽³⁴⁾によってみよう。常食のサツマイモを毎年イノシシに食い荒され、蘇鉄で飢を凌いでいたが、1936の記事では当時提唱されていた農山漁村の更正は、ここでは猪害防除にあるとして、資金を出し合い、2400^円の猪垣を築き、25名の警戒隊を常置した。しかし、崩れた場所を越えてイノシシが浸入し苦勞した。なお、国頭郡地方とし

ては1942, 県考案の猪捕獲柵を40か所に設置し, 前年度に415頭を捕った。また東岸の久志では沖縄在来種の「久志犬」を用いて猪狩し, 防除に努めた。この犬は本島では広く用いられたものであろう。

ところで, 名護市域では明治19年(1886)の「名護間切各村内法」によると, 「猪垣通よす木苗並にか竹植付サセ候事」とあり, 猪垣の維持に努力すべきことを示し, また「猪大垣破」については科金を申付ること⁽³⁵⁾になっていたが, これはさらに後述しよう。なお, 猪垣の管理に関しては, 同様なスタイルの記載が国頭郡下の金武・久志・本部・今帰仁・羽地・大宜味・国頭などの間切各村内法にある。各村の実情に合せ定められたものと推察され, 猪垣の存在を認めうろと思っている。その内容は後で触れる。

つづいて国頭郡の南端, 恩納村でも, 猪垣は山地と里との境に延々と続いていた。猪垣は密生した竹林や, 溝とその掘土で造った土堤であり, 海中からとった平板状のサンゴを壁状に仕立てたものもあった。これらの猪垣は15年前(1965)ころまではよく残っていたが, 現在はその一部分さえも見ることができなくなっている⁽⁹⁾というが, 残念である。その所在地を特定はできないが山里を限るその延長を注目したい。なお, 『南島探験』では恩納間切の明治26年の事情を「野猪ノ害多キ為メ一問切ニシテ十里以上ニ及フ石垣ヲ繞シ

テ, 其害ヲ防ク。猪垣当ト云フ吏員ヲ特ニ設置シテ其修繕等ノ事務ヲ担当セシム。」⁽³⁶⁾と述べている。延長10里(39^{キロメートル})は村域からして長大過ぎる感じもするが, 屈曲もしつつ延長していたものと思われる。

さらに南の中頭郡域においては野猪に重傷を負わされることがあった。明治33年(1900)具志川間切で, 同35年美里間切(沖縄市)で生じたが, 助人は斧や棍棒で対応した。⁽³⁷⁾銃での対応はなかったが, 沖縄市域での銃の所持は明治34年6挺⁽³⁸⁾に過ぎぬことから当然といえよう。1935には越来で猪害に対し, 銃殺隊を組織して対処すべく県に許可を求めた。⁽³⁹⁾鉄砲は普及したとみられる。

猪垣の築造年代

全国的にみて猪垣の築造は, 岡本大二郎博士の研究によれば, 元禄頃(1700ころ)と天明~文化年間(1800ころ)と2つの大きなピークのあることが示されている。⁽⁴⁰⁾沖縄県の事情を以下に考察を進めたい。

沖縄本島の猪垣は, 『球陽』に18世紀の記事がある。すなわち, 大宜味村の塩屋・屋古前田・田港・渡野喜屋・根路銘の5集落間, 2631歩(4.7^{キロメートル})を7か年かけ石で改築した。これは大風雨により損壊したため⁽⁴¹⁾⁽⁴²⁾であったが, その創築はさらに遡るものの, 明確にできない。ちなみに石垣島においても年代は不明であるが, 「往古の時」に兄弟2人して石の猪垣を築いて民が安楽したと, 『遣老説

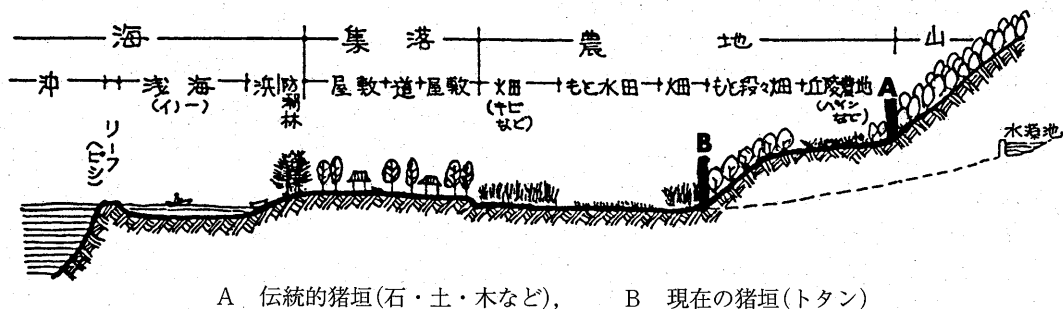


図3 模式的山原型村落の断面図(猪垣と土地利用)

『名護市史』の原図に加筆し作成

伝』にある。⁽⁴³⁾沖縄においても本土と同様に近世に築造されたものであるが、年代は明らかにしえない。

ところで国頭地方の猪垣は明治以降も築造されてき、奥の石垣を主とする圍繞型の猪垣は明治36年（1903）に築造された。それ以前は竹垣を各農民が造っていた。従って上杉県令巡回時に注目されなかったのも当然と思われる。これは昭和34年放棄されたが、⁽⁴⁵⁾これは後述する。他方、大宜味村では1955まで造られた。⁽⁴⁴⁾本土において明治以降の設置は殆ど見かけられないと思うが、この点は沖縄県下での大きな特色といえよう。

猪垣の位置

耕地と森林との境に猪垣は設置されていたが、その位置をさらに具体的に考察しよう。本島の北部、^{やんばる}山原地方は図3の模式図でみるような特徴的な地形と、土地利用がある。⁽⁴⁶⁾標高500^{メートル}以下の山岳地域は、中生界の粘板岩・千枚岩の名護層と、中生界ないし古オ三系の砂岩・頁岩の嘉陽層などからなり、山麓には開析された段丘が分布する。段丘の下にはビーチロックが発達している。⁽⁴⁷⁾僅かな海岸の平地には集落・耕地がみられ、段丘崖は林地、段丘面は開墾地で、傾斜変換の山地（森林）へと続く。大宜味村の地域では集落のある平地から急勾配でせり上る斜面を中山^{なはやま}といい、松敷・竹敷などの仕立敷（造林地）がある。この林は山崩れを防ぎ、貯水涵養林、開墾地の防風林（抱護林）の役目も果し、自由な伐採も許さなく、保護管理されてきた。⁽⁴⁸⁾

中山の上部、開墾地から続く山地は、国有の森林地域で、沖縄で最重要な森林資源である。国頭地方ではここから薪材を産出し、^{やんばる}山原船で那覇首里に販売し利益を得ていた。⁽⁴⁹⁾その結果か、この地域は「沖縄島三地方ノ中ニテ一等ノ遊情ナル所也」と地元警察署長の言を笹森氏は記すが、なお氏はこの地方の林政、猪害防除などを「良法美政」と賞めている。⁽⁵⁰⁾その林制は王府時代から重視され、薪

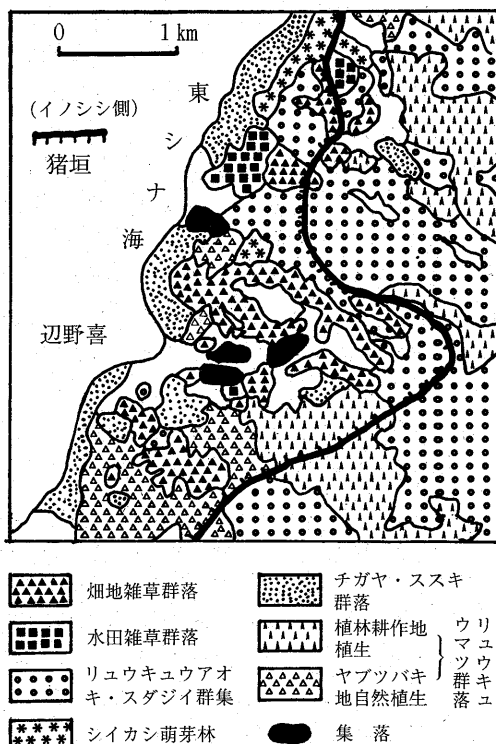


図4 沖縄県国頭村地域における猪垣と現存植生

環境庁1/5万現存植生図・千葉徳爾博士原図により作成。

炭・木材を産するとともに保護されてきたが、他方開墾もされサツマイモの栽培など農民の自給的食糧の生産地でもあった。中山に接する段丘面は柚山ともいわれる国有地であったが、開墾されて私有地となった所も多い。明替地・焼替地・喰実畑・キナワ畑などともいわれ、大宜味村では20等分し、その1つを毎年各戸に割当て焼替えサツマイモを栽培し、あと植林をし20年で1回転させた。ここには段々畑が発達しているというが、一部は傾斜面の森林にも及んでいたと思われる。なお中山の地域に段々畑が開かれた地域もあり、奥の集落の周囲はその典型とみられる。⁽⁴⁵⁾

かような地形・土地利用に対し、猪垣は段丘面の明替地と林地との境に設置された。この猪垣の展延と土地利用の関係を図4に示し

たが、耕地の周囲を囲んで延びている。この猪垣を越えて森林の奥地にもサツマイモ畑が設けられた場合もあり、その場合は畑の周囲を木柵で囲ったことは前報でも述べた。また大宜味村の押川は明治時代に士族婦農の屋取集落として成立したが、その外囲に猪垣は設けられていた（大宜味村役場宮城弘氏談）。

ところで、イノシシの好餌であるサツマイモは、県民にとっても極めて重要である。大槻文彦著『琉球新誌』⁵¹⁾には「甘 薯ハ終年繁茂シ、土人常糧トス」「貴人ハ米ヲ食ヒ貧人ハ甘薯ヲ食フ」とある。土人とは土着人の意で、特に軽べつの意はないと思うが、貧人というのも一般庶民のことであり、年中サツマイモの得られることは注目される。沖縄においてサツマイモは7月に植えて12月に収穫するが、なお食糧不足の時は満90日で食用に供することができ、1年に3～4回の収穫がえられ、天候や地力のよい場合には他府県の2倍の収穫がある。⁵²⁾なお、他府県農民1戸当たり耕地が9.6反に対し、沖縄では3.9反に過ぎない。耕地狭小な沖縄で人民一般の生命をつなぐうるのは、1年に3回収穫し、かつ収量も多いサツマイモによると笹森氏は述べている。⁵³⁾沖縄県民にとって主食のサツマイモは極めて好都合な作物といえるのである。イノシシは掘り取ったサツマイモをススキの中に覆い隠して置く知恵も持っている(写真1)ことは驚きである。

ところが、杣山開墾には明治25年(1892)いわゆる開墾事件が生じた。⁵⁴⁾開墾適地を払い下げ、無禄士族に帰農させ、開発を進めることにに対し、農民が反対した。それは杣山から砂糖製造用の薪木や樽板、牛馬の飼秣、作物の肥料などの産物を得ていたのを奪い、かつ水源の涸渇による水害の招来などを理由とした。しかし払い下げは実施された。この開墾地ではサツマイモを栽培したが、その最大の障害は猪害で、猪垣の工作が緊要であった。この建設が進まぬため、開墾もまた進展しな



写真1 ススキ原のウジ(通路)にイノシシが隠したサツマイモ(ススキで覆う)

国頭村役場経済課提供(1989)

かった。士族を入れるのは屋取集落となるが、この北部地域ではその発達はさして顕著ではなかった。⁵⁵⁾開墾地へは近傍村の二三男が多く入ったのである。開墾にとって猪害が障害をなし、多大の労力や出費で猪垣を築造する必要があったが、これは無禄士族にとっては困難であったとも考えられる。

猪垣の維持・管理

猪垣の維持・管理

沖縄では猪垣の築造は地元農民が自力で行い、王府や行政側は特別な支援もなく、ただ褒賞のみを行った点、大きな特色である。薩摩藩や王府の搾取の著しいこともあり、農民は食糧確保の緊要性がいっそう強まり、止まれず自力で厳重かつ長大な猪垣を仕上げざるを得なかったわけである。後述のように鉄砲の普及をみなかった沖縄では、猪垣を主に、これに付設の落とし穴と槍とにより猪害を防除したのである。なお、暖地で木垣の保存年数の短かいこと(2—3年)は、対馬とも共通であるが、ここでは石垣や土手の猪垣構築にむかわせたといえる。ただし、現実には竹木の垣もかなりあったようである。したがって樹木の伐取もかなり行われたようで、つぎの

ような下知もあった。すなわち、文化6年(1809)国頭地方での「田地奉行規模帳」⁽⁵⁶⁾で「猪垣之儀、作毛を守護故、別而不_レ入_レ念候而不_レ叶事にて破損等則々修補申付。尤年々木数大分伐取調候に付ては専_ニ杣山之為不_レ宜、其上百姓手隙之費多、旁以不_レ宜儀候間、小松植付盛生させ候様致_ニ下知_一候事」とある。猪垣の手入に毎年伐採する木も多く、杣山にも百姓にも宜しくなく、小松の植林をいっているのである。

土石で築造された猪垣でも毎年その修理を行い、完璧な防壁の整備が必要であった。しかし、それでもイノシシの侵入はあり、落とし穴やインビキで捕獲した。とくに台風の通路に相当する沖縄では、水害で猪垣の流失することがあった。文政9年(1826)には国頭村でその例があり、さらに干害もあった。

ところで、明治政府は明治19年(1886)に「間切内法」を制定し、極めて詳細な農村統治を行った。そのなかに猪垣の維持・管理の項がある。金武間切(村)では「猪垣之儀持地ニ分配シテ以テ修繕セシム而シテ垣構ヲ設ケ置キ時々巡視セシメテ破壊所アルトキハ則々捕付其垣壱間ニ金五銭ツ、科金ヲ取立テ村役場ニ納メ置キ何欵戸主惣揃之際支配ス右構ハ壱年勤ニシテ米壱斗式升五合ヲ給与シテ人民一同之撰定スルモノナリ」⁽⁵⁷⁾と定めている。ここでは猪垣を農民に分担して修理させ、また農民から選出の「猪構」が巡視して、猪垣の破損か所のある時は科金をとったのである。本来、農民発想の猪垣であるが、行政側がその維持・管理には嚴重に関与していた点注目される。また、名護間切では「猪大垣破一個ニ本人貳円ツ、夫地頭掟拾銭ツ、耕作当式拾銭ツ、科金申付候事」⁽⁵⁸⁾と決め、イノシシの大垣破損に対しては農民や役職者に連帯して厳しく科金をとった点にも、支配の徹底さが知られる。

一方、猪垣の維持のために、その手入を命じていた。金武間切では「猪垣通ヨシ苗植付

サセ候事」⁽⁵⁹⁾、国頭間切では「猪垣通場所見合ヨシ苗並相当ノ竹木下知方可然事」⁽⁶⁰⁾とヨシや竹木を用いた手入のことを示した。これは大宜味、今帰仁、本部の間切でも同様に行われた。⁽⁶¹⁾さらに国頭間切では「荒地明替並猪垣仕合又ハ御用入材木杣取方且共有船及他船作事請ニテ船材木杣取其他ニ付山中ヘ昼夜在留ノ時豚羊ヲ殺シ支配致候向モ有之哉相聞ヘ」るが、その際に豚や羊を殺し食べることを禁じている。⁽⁶²⁾猪垣修理のための木材の伐り出しは認めていたが、その折の飲食は農民にとっては楽しみであったと思うが、豚羊の殺食は制限していたのである。なお、ここでも「猪垣ノ儀破_レ次第則々修繕致シ若シ不行届者ハ壱間ニ付科銭三舛ツ、召行ヒ大破ノ節ハ吟味ノ上重キ科米申付候事」⁽⁶²⁾とあり、科銭は米で厳しく納めさせている点特色である。

猪垣破損の際、「耕作当」^{アタイ}にも科金のあったことは前記の文書で明らかであるが、「村耕作当勤方ノ義毎日朝晩百姓中仕口之首尾承届月ニ五度ツ、走廻り作場見届」⁽⁶³⁾ることを定めていた。間切内法の一部をみた限りでも、極めて厳重な農村の支配体制が整っていたことを知り、その一環に猪垣の管理も含まれていたのである。

なお、かような支配は「原山勝負」⁽⁶⁴⁾によりさらに徹底されていた。これは王朝時代からあり、毎年春秋に役人が間切を巡視し、農林業の指導を行ったが、その際、風俗・習慣・勤怠などまで調べ、その成績の発表会を催し、余興もあって農民を楽しませた。ただし、成績の悪い村の村頭・耕作当・山当たちは公衆の前で顔に墨を塗られ、罰金もとられた。この結果、村の対抗意識が強まり、しがって農民への要求も厳しくなり、農民は迷惑した。この調査項目17項のうちに「猪垣破損」があった。明治以降もこの行事は続けられ、沖縄県は優等村に賞与金を出し、農業奨励策の1つとした。

なお、別の褒賞が猪垣に関して与えられた。

降って昭和12年、有栖川宮厚生資金が名護地域の幸喜集落に伝達された。その条件の1つに村疲弊の主要な要因をなお猪害防除として、猪垣1030間(1873^{キロメートル})の築造による更正⁽⁶⁵⁾が含まれていたのである。

上記の原山勝負に附帯して、明治43年から国頭郡で「鼠駆除勝負」が実施された。⁽⁶⁶⁾大正8年(1919)には年3万~5万尾台のネズミを捕獲しているが、猪害については全くふれていない。イノシシの捕獲が進み、鼠害が著しくなったためか、なお検討を要する点である。

戦後の猪垣の管理をみよう。戦場と化した沖縄で、猪垣も荒廃していたが、農業生産のためには村民挙げて、その修理が始められた。⁽⁶⁷⁾しかし、石積みの猪垣の完備はなかなか困難であった。国頭村辺野喜では雑木を組み合せ構築した猪垣(ヤマシシハキ)が1962設置されていた。佐々木高明博士の焼畑調査報告では、すでに「大垣」(ウーガチ)の大型猪垣の大部分は失われたものの、山地斜面一帯の共有地の原地(アラジ)には村民に割当した焼畑(アキケーバル、アラジバル)が開かれ、その周囲に共同で木柵のサナガキを設置した。ここの焼畑は3年ほどで放棄されるが、その理由の1つには猪垣の耐久期間の問題があった。この点は前述した点と共通である。

奥の猪垣

国頭村奥の猪垣が囲繞型であることは、前報で図示し述べた。ここは猪垣の築造と維持管理の典型といえ、かつ資料も豊富に保存されている。以下にその実態をみよう。⁽⁶⁸⁾

奥の集落を囲む山地は、中山に相当する斜面を明治30年(1897)県から払い下げを受け、個人が買い取り、段々畑を開いた。畑面積は拡大したものの、猪害も著しく、各自が竹垣を巡して防除したが、不経済であった。ここには協同体の組織が発達し、⁽⁶⁹⁾共同店の創設者、糸満盛邦氏が「共同猪垣」を提案し、明治36年に大猪垣の構築を実施した。集落の周

囲を囲んだ大垣は約12^{キロメートル}、この外の外垣とさらに開墾地の垣が約12^{キロメートル}で、計25^{キロメートル}の猪垣が完成した。この結果、1945ころには水田27町、畑15町、開墾15~20町の耕地が保全された。農作物被害は最小限に食い止められ、増収を図り得た。

猪垣の築造は多大の経費・労力を要するが、区民は自力でその築造・修理を行った。所有耕地面積に応じて担当か所を決め、修理を義務づけた。区にはその割当を示す「猪垣台帳」が11冊保管されている(写真2, 3)。明治45年から昭和20年にわたるものである。帳簿には割当か所の番号・長さ(尋尺)・屋号が記され、移動も注記されている。その帳簿の管理は厳重で、「本帳簿ハ字区長ノ外手ヲ入レルコトヲ得ズ」「垣主変更スル時、兩人立合ノ上ナスコト」「垣主変更ノ時ハ譲渡人ノ捺印ヲ要ス」の3項が昭和13年の大垣台帳に記されている。猪垣の維持管理は奥区民の最重要な義務の1つとされ、「垣当りの制」(垣監視役)と「総回り制」(全員による定期的視察)を設け、垣当りは巡視し、破損か所を発見すると、区当局から担当者すなわち垣主に通告し、3日以内に修復させた。不実行の場合は区当局が修復し、その費用を垣主に負担させた。また、総廻りの際は事前に「垣掃除」の通知を出し、掃除・修復されていない場合には垣主は罰せられた。その維持管理には万全が期せられたが、破損か所からイノシシの侵入が直ちにみられることからすれば、緊要事といえる。

いま昭和5年の帳簿をみると、管理も完全とはいえなくなっている年代であるが、その事情が若干知られる。ウグ原で割当の地数628あり、このうち558地6分は「新垣ヲ取ル」ということで、割当てて新たに築造させたものとみられる。残りの74地4分は垣主が築造せず「金トナス」ということで、1地48銭の割で徴集した。その個人別の地数は最高が9、1地の者もあり、17人の垣主で計33円79銭



写真2 奥の大垣台帳(表紙)

写真3 奥の大垣台帳の内容(昭和13年)

を納めている。ところで、その支出内訳は「垣分」時の酒2斗1升余の代金が19円62銭で最も多く、「垣当手当」が10円で、両者が主体をなしている。垣当の手当は区の役職として出したものであるが、垣分の酒代は恐らく垣の割当や築造に際してのもので、慰労の費用に充当したものとみられる。なお、垣分の時、未青年者にはソーメン代1円20銭、菓子代1円が支出されている。かようにして猪垣は維持されてきたことが知られる。

奥の猪垣(大垣)は「東垣」と「西垣」とに2分されていた。東垣は集落の南側斜面、西垣は北側の斜面に設けられていた。いま猪垣台帳で東垣をみると、番号総数は552で6区に分けられている。長さは尋尺で現されているが、記載内容を検討してみると、尋は6尺でなく、10尺=1丈(3.03^{いり}尺)としていることが知られた。かように考えて、その総延長を集計してみると、2671.47丈(8,094.6^{いり}尺)となった。総延長は約16^{キロメートル}といわれるので、

西垣も8^{キロメートル}ほどと思われる。東垣の割当の最長は21尋(63.6^{いり}尺)、最短は2.3尺(70^{センチメートル})であり、平均は4.8尋(15^{いり}尺)となる。農家は耕地1筆につき猪垣1か所を担当するが、1家が数か所の猪垣を分担することになり、相当の負担となる。女手のみの農家は困却し、人を頼み義務を果す場合もあったという。これは生存上、必要不可欠の緊要事であったわけである。

鉄砲

沖縄で猪害防除に鉄砲が用いられなかったことは前報で述べた。これは本土との大きな相違である。『球陽』⁽⁷⁰⁾は沖縄では「往古ノ俗習、今ト大イニ異ル」と記すなかで、動物については「尤モ猪鶏多シ」と述べ、「兵器ニ刀稍弓箭劔鉞(注、ツルギ)ノ属アリ。国貧ニシテ鉄少ケレバ刃ミナ薄小ニシテ、多ク骨角ヲ以テ之レヲ輔フ。(我国鑛鉄ノ属ヲ産セズ……)」と、砂鉄を産せず、刀劔も薄く小さいことを云っている。鍛冶の技術は薩摩や種子島から奄美経由で、いつごろからか沖縄へ伝ってはいた。⁽⁷¹⁾石垣島大浜村の例では往時、鉄農具がなく、小舟を造って薩州坊ノ津にいき、鉄器を買って帰ったという。⁽⁷²⁾

さらに琉球を支配した島津藩は「鉄砲所持の禁止」と「武器輸出の禁止」を沖縄で行ったが、武器の所持または取りあげはしなかった。⁽⁷³⁾海上交易の要地であった沖縄は、江戸時代以前でも、鉄砲の輸入は容易であったと考えられるが、禁令のもとそれも所持せず、むしろ平和的な儒教政治・文化政治となっていた。⁽⁷⁴⁾沖縄は自然条件からして、漂流⁽⁷⁴⁾や外来文物の流入も著しかった。交易の発達はあるが、薩摩藩は利益独占の立場から、諸藩・外国との交流を禁じた。⁽⁷⁵⁾かような条件下、沖縄人は鉄砲の受け入れには消極的であったとみられる。

ところで、ペリー来航に際して、本土では厳しく拒否した上陸が、沖縄では簡単に実現した。米将兵は沖縄本島に上陸し、各地を踏

査した。そして野猪を探したり、火縄銃よりも進んだ銃尾に弾丸をこめる鉄砲を用いたりして、沖縄住民を驚かした。⁽⁷⁶⁾

銃の普及をみるのは明治以降であり、それも威銃の発想はなくて、専ら狩猟に用いた点、本土と著しく異なる。伝統的には、猪害防除は猪垣と落し穴、犬を用いた槍とにひたすらよったのである。鉄砲の利用はこのあと戦後においても消極的とみられる。

猪垣の消長

イノシシの捕獲

明治以降、鉄砲の普及をみたが、その数はさして多くなかった。沖縄県全域で狩猟免許状下付人員（明治24年まで銃猟規則は施行しなかったが、この人員のうち銃猟者数は不明）は明治34年（1901）254を数えたものの、前年の279より減少している。⁽⁷⁷⁾著しい銃の普及はなかったものと思う。降って戦時中の昭和18年には、県は「野猪捕獲柵設置費補助」⁽⁷⁸⁾を行った。当時「本県ノ野猪ハ中頭郡ノ北部、国頭郡及八重山郡ニ存シ年々五十三万円ノ被害ニ及ビ近年ハ其ノ被害益々増加ノ傾向アリ捕獲柵設置ヲ以テ耕地ヘノ侵入ヲ防止シ又畝ニ依ル捕獲ヲ計画実施中ナリ本年度ハ六十五箇所ノ設置ニ対シ三、〇〇〇円ヲ補助セントス」ということであった。県が補助金を出したことは、従来あまり見られないことで注目されるし、また柵と畝とで鉄砲を挙げていない点も特色で、本土と著しい相違といえよう。ただし、沖縄では据銃の普及があり、昭和10年読谷村では絶命者を出す事故があった。⁽⁷⁹⁾

第二大戦で戦場となり、荒廃を極めたが、戦後は森林地域も米年の施設下に置かれ、地元民の立入不能の地域も広くみられた。イノシシは自由に生息し近辺の農耕地に侵入して、被害を与えたことは当然の成行であった。

1950ころ国頭地区では猪害が著しくなり、猪垣や猟犬だけでは対処できず、猟銃の許可を希望した。⁽⁸⁰⁾なお、山林は乱伐も加わり、

福地川などでみられるように氾濫を生したが、山林の木を伐り山稼ぎに出精しなくては生活できぬ矛盾もあった。⁽⁸¹⁾そうしたなかで1952年には猪垣計56^{キロメートル}の完成をみている。そして猟銃の許可はようやく1954に実現した。⁽⁸²⁾なお琉球政府は1957「野生鳥獣対策事業補助金」に関する立法をし、1966の規程では「猪駆除奨励金」の制もあり、補助率は50%以内と定められた。⁽⁸³⁾これには猪頭数と猟犬の実績の報告を要したが、槍と銃とによる捕獲であったとみられる。なお、昭和51年の狩猟免許状交付状況では、ワナ・網が34、装薬銃・ガス銃が654、空気銃が10、計698で、⁽⁸⁴⁾銃が主軸をなし、槍は挙がっていない。ちなみに、この年の猪捕獲数は643頭で、前年よりは増加している。なおこのあとの猪捕獲数は増え、1983には928頭でピークを示し、あと500～600頭台に減少している。⁽⁸⁵⁾しかし、かような銃その他によるイノシシの捕獲のみでは猪害は防除できなかった。波形トタンなど新資材利用の猪垣を用いて防いでいるが、石垣などの築造よりは、はるかに容易に設置されうることになった点で、好都合になったと思われる。

旧猪垣の放棄と新対応

前述の完備された奥の猪垣は、その後維持管理が困難となり、1部は前記のように維持された（ウーガチ）ものの、昭和34年に放棄せざるを得なくなった。それは人口の都市への流出によるもので、この傾向は昭和20年代から始まっていた。昭和15年以降の沖縄県の人口は増加の傾向を辿ったのに対し、国頭郡北部の3村の人口は昭和25年以降、著しい減少傾向を示した（図5）。この結果、耕地の耕作は困難となり、放棄のものが増え、猪垣の維持もできなくなったのである。⁽⁴⁵⁾林地と段々畑の境に設置されていた猪垣は、放棄された畑地が樹木に覆われるに伴い、林地に埋もれ、崩壊もして、所在不明にもなっている。写真4は奥集落を囲む山腹の変貌を示したも

のであるが、段々畑が林地に変っている点が明瞭である。かような変貌は国頭郡北部一帯にみられたものである。人間の耕作域が退行し、イノシシの生息域が拡大したわけである。

かようにして山腹の段々畑の林地化が進み、耕地は氾濫原や海岸の平地のみが残された。ここはもとから貴重な稲作水田であったが、1966—67にサトウキビ畑に変ることになり（琉球新報1966, 10）、現在に至っている。

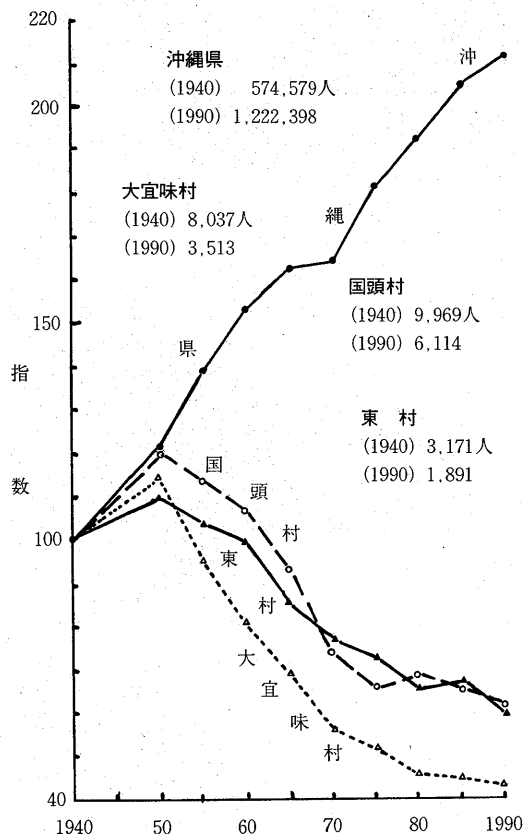


図5 沖縄県および国頭郡北部3村の人口推移 (1940～1990)

沖縄県統計年鑑により作成。

猪害は当然にあり、イノシシは人間に気づかれぬようにか、サトウキビ畑の中心部を食い荒し、農民を困却させる。その防除のためには波形トタンで山麓部の畑の境を囲っている（図3）。また、金網・カカシや猟銃などで

対処している場合もある。なお、1966には大宜味村・国頭村で、ラムタリンによる防除試験を実施した。これはイノシシが嫌う臭と味を発する薬剤を散布するもので、その効果は場所により一様でなく、各種方法の組合せが大切とされた。⁽¹⁾しかし、あまり普及はみなかったようである。

ところで、戦後農村人口の流出で耕作域が退行した反面、山地の開発が他方で進められた点を注目したい。まず、1958から本島北部の海蝕台地・丘陸地の開発が進められた。ここは個人所有地が多く、パイナップル・サトウキビが作付された。さらに本土復帰後は日本政府と沖縄県とにより、内陸部にも地域開発計画が立てられた。⁽⁶⁶⁾そして国頭地域は石垣島を抜いて県下最大のパイナップル産地になっている⁽⁸⁷⁾（写真5）。

イノシシは春植え、夏植えのパイナップルの芯芽を好んで食べる。成長した果実はトゲが生ずるので食べにくい、芯芽は軟かく食べ易い。サトウキビは甘味の増す12月末以後がねられる。また、みかんの実は皮をむいて食べるが、前肢で枝を倒す術を知っている。なお、人気のない場合は昼間でもイノシシは侵入して来るなど始末が悪いものであるという（国頭村教育委員会大嶺進一課長談）。さらに植栽のみかん。茶などの樹木や土手の芝に施肥をすると、ミミズが生育するが、これを食べるために掘起し、根がぐらつき間接的に被害の生じることもある（沖縄県立博物館千木良芳範学芸員談）。

なお、上記のトタン・漁網・有刺鉄線などでの猪垣築造による防除では、農家は補助金を申請するが、予算の枠内で費用の半額が補助される。また、駆除事業ではイノシシ1頭を3,000円で買上げ、その経費は県と村で負担する（国頭村役場親川国広課長談）。捕獲にはワナ・鉄砲（インビチ）を主に用い、捕獲してイノシシの下アゴを提出して補助金を受ける（名護市役所島袋正敏氏談）。猪害防

除は現在も気をゆるめられない課題である。

むすび

沖縄本島の猪垣は、北半部にみられ、西海岸では連続延長した長城型に構築され、東海岸では集落・耕地の周囲を囲む囲繞型で設置されていた。猪垣には落し穴も併設されたが、捕獲は専ら槍と犬とにより、鉄砲・威鉄砲の利用は近世にはなかった点、本土と著しく異なる。

猪垣の築造は近世からとみられるが、明治以降にも設置され、戦後の昭和35年ころまで用いられた。本土より極めて長期に利用された。その築造は農民が自力で行い、行政側の支援は昭和年代以降であった。猪垣は石垣を主に、土手、竹木垣などもあったが、その築造や維持管理は農民自らが共同で厳重に行っ

てきた。

猪垣の築造位置は耕地や林地との境であったが、段々畑を山地に拓いたことから、猪垣は山腹に放置された。人口圧も大きく、食糧のサツマイモ生産のため、耕地は山腹にまで

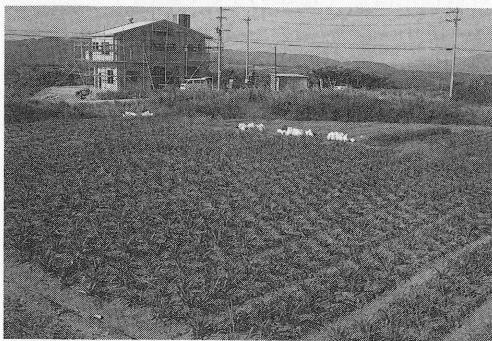


写真5 沖縄本島北部、丘陵地(東村)の開拓パイナップル畑(1990)



写真4 国頭村奥、集落・耕地の変貌

(上) 一昭和30年ころ、(下) 一昭和61年ころ。
両側の山地斜面は段々畑が林地に変る。猪垣は(上)で上手に築かれ、(下)で山麓にトタンで造られる。平地は水田からサトウキビ畑に変る。前方は太平洋。『字誌奥のあゆみ』による。

拡張されていたのである。

戦場と化した沖縄本島で、戦後は農業生産増進のため、猪垣の修復が重要で、琉球政府もこのために援助を行った。ところが、農村からの人口流出、都市への人口集中で、耕地は放棄され、猪垣の維持管理も困難となり、地域差はあるものの、一般的には昭和35年ころを境に猪垣も放棄されるようになった。耕地の退行により、猪垣は樹木に覆われるに至り、低地の水田はサトウキビ畑に変化し、新たな猪垣がキビ畑の山麓よりにトタンなどで設けられるようになった。一方、イノシシの捕獲は槍から鉄砲へと漸次変った。

なお、このあとパイナップルを主体に、内陸部の丘陵地の開発が、琉球政府や日本政府により進められ、新たな猪害防除対策が必要となった。トタンのほかフェンス・網などが用いられているが、猪害対策はなお今日の課題である。

前報と同じく指導・教示をいただいた各位に、深甚の感謝の意を表するものである。なお科学研究費補助金、文教大学研究費の利用にも恵まれた。引き続き八重山群島に関する報告をまとめ、本テーマの研究を完結する予定である。 (未完)

文 献

- (1) 高良鉄夫・東清二：イノシシの被害と防除について、沖縄農業、6—2、1967、44—54.
- (2) 名護市史編さん委員会：名護市史、資料編、3、戦前新聞集成、2、名護市役所、1985、278頁.
- (3) 矢ヶ崎孝雄：沖縄県下の猪垣（一）、文教大学教育学部紀要、26、1992、14—26.
- (4) 琉球政府：沖縄県史、第11巻、資料編、Ⅱ、上、杉県令関係日誌、1965、1—58.
- (5) 沖縄県沖縄史料編集所：沖縄県史料、近代、4、上杉県令沖縄関係資料、沖縄教育委員会、1983、1—250.
- (6) 沖縄県教育委員会文化課：沖縄歴史の道調査報告書、Ⅱ—国頭・中頭方西海道（Ⅱ）一、緑林堂出版、1986、12—75.
- (7) 同上：沖縄県歴史の道調査報告書、Ⅵ—国頭地方東海道・他—沖縄県教育委員会、1987、6—7、36—37.
- (8) 谷川健一：日本庶民生活史料集成、第1巻、探検・紀行・地誌（南島篇）、三一書房、1968、447—602.
- (9) 仲松弥秀：恩納村誌、村長大城保晴、1980、128—129.
- (10) 千葉徳爾：沖縄八重山諸島のイノシシとその狩猟、愛知大学文学論叢、第44輯、1970、129—153.
- (11) 前掲(4)、30頁.
- (12) 〃 35—36.
- (13) 前掲(6)、73頁.
- (14) 矢ヶ崎孝雄：長崎県下の猪垣（二）、文教大学教育学部紀要、25、1991、26—42.
- (15) 前掲(4)、38頁.
- (16) 〃(6)、74頁.
- (17) 〃(4)、39頁.
- (18) 佐々木高明：沖縄本島における伝統的畑作農耕技術——その特色と原型の探求——人類科学、第25集、1973、96—97.
- (19) 東村史編集委員会：東村史、第1巻、通史編、東村役場、1987、43頁.
- (20) 同上：東村史、第3巻、資料編、2、東村役場、1984、412頁.
- (21) 同上(20)、419頁.
- (22) 〃 408、422頁.
- (23) 〃 424頁.
- (24) 〃 425頁.
- (25) 〃 435頁.
- (26) 前掲(19)、37頁.
- (27) 前掲(8)、471頁.
- (28) 前掲(4)、26—27.
- (29) 〃 28頁.
- (30) 宜野座村誌委員会：宜野座村誌、第4巻、資料編Ⅱ、文献資料、上、宜野座村役場、1988、83—84.
- (31) 同上、第3巻、資料編、Ⅲ、民俗・自然・考古、1989、222—225、275—276.
- (32) 前掲(4)、46頁.

- (33) 〃 43—44.
- (34) 前掲(2), 220, 224, 278, 293—294.
- (35) 琉球政府：沖縄県史, 第14巻, 資料編, 4, 雑纂, 1, 琉球政府, 1965, 338—345.
- (36) 前掲(8), 128—129.
- (37) 沖縄市史編集委員会：沖縄市史, 第8巻, 資料編, 7, 上, 沖縄市教育委員会, 1986, 75, 143頁.
- (38) 同上, 第7巻, 資料編, 6, 上, 近代統計書にみる歴史, 1990, 45頁.
- (39) 同上, 第8巻, 資料編, 7, 下, 1988, 519頁.
- (40) 岡本大二郎：虫獣除けの原風景, 日本植物防疫協会, 1992, 148—149.
- (41) 桑江克英：球陽, 三一書房, 1971, 258頁.
- (42) 沖縄大百科事典刊行事務局：沖縄大百科事典, 上, 沖縄タイムス社, 1983, 150頁.
- (43) 前掲(8), 325頁.
- (44) 〃 (1), 48頁.
- (45) 奥のあゆみ刊行委員会：字誌「奥のあゆみ」, 国頭村奥区事務所, 1986, 141—143.
- (46) 前掲(2), 本編, 11, わがまちわがむら, 1988, 53—54.
- (47) 青野寿郎・尾留川正平：日本地誌, 21, 大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県, 二宮書店, 1975, 553頁.
- (48) 大宜味村史編集委員会：大宜味村史, 通史編, 大宜味村役場, 1978, 58—59, 72—73.
- (49) 池野茂：沖縄「山原船」水運の歴史地理的な考察, 地域と交通, 大明堂, 1975, 47—75.
- (50) 前掲(8), 471頁.
- (51) 大概文彦：琉球新誌, 写本, 1873.
- (52) 前掲(8), 557—558.
- (53) 〃 547頁.
- (54) 国頭村役所：国頭村史, 国頭村役所, 1967, 332—338.
- (55) 田里友哲：沖縄における開拓集落の研究, 琉球大学法文学部紀要, 史学・地理学, 第23号, 1980, 45—51.
- (56) 小野武夫：近世地方経済史料, 第9巻, 近世地方経済史料刊行会, 1932, 70頁.
- (57) 前掲(35), 374頁.
- (58) 同上, 338頁.
- (59) 〃 369頁.
- (60) 〃 402頁.
- (61) 〃 420, 436, 451頁.
- (62) 〃 406頁.
- (63) 〃 371頁.
- (64) 前掲(48), 67—69.
- (65) 〃 (2), 224頁.
- (66) 沖縄県国頭郡教育部：沖縄県国頭郡志, 沖縄県国頭郡教育会長, 1919, 91頁.
- (67) 前掲(48), 318頁.
- (68) 佐々木高明：日本の焼畑, 古今書院, 1972, 257—261.
- (69) 田村浩：琉球共産村之研究, 岡書院, 1927, 149—167.
- (70) 前掲(41), 12—13.
- (71) 谷川健一：沖縄・奄美と日本, 同成社, 1986, 64—68.
- (72) 前掲(8), 536頁.
- (73) 仲原善忠：琉球王国の性格と武器, 季刊, 沖縄と小笠原(南方同胞援護会), 1958, 38—43.
- (74) 岩崎卓爾：ひるぎの一葉, 前掲(8), 422頁.
- (75) 原口虎雄・原口泉：伊地知貞馨著, 沖縄誌, 青潮社, 1982, 561—562.
- (76) 土屋喬雄・玉城肇訳：ペルリ提督日本遠征記(二), 岩波文庫, 1948, 7—107.
- (77) 前掲(37), 第7巻, 1990, 450—451.
- (78) 〃 (5), 近代, 1, 昭和十八年知事引継書類, 1978, 228頁.
- (79) 読谷村史編集委員会：読谷村史, 第2巻, 資料編, I, 戦前新聞集成, 下, 読谷村役場, 1986, 251頁.
- (80) 前掲(20), 408頁.
- (81) 〃 411頁.
- (82) 〃 435頁.
- (83) 琉球政府：公報, 第87号, 1966, 1—5.
- (84) 沖縄県保健総務課：環境保健行政の概要, 1977, 301頁.
- (85) 沖縄県：環境白書, 1990, 384頁.
- (86) 前掲(47), 582—584.
- (87) 〃 616—618.